

(Ⅱ-44) 全唐詩による漏刻の文献的研究

千葉工業大学 大学院 学生員 益子 泰人
千葉工業大学 工学部 正 員 武藤 速夫

1. はじめに

水時計は、時計の発達過程で機械時計の出現以前に、日時計の非連続性の欠陥を改善するものとして位置付けられている。この水時計の歴史は古く、多くの型式が世界の各地に見られるが、中国で開発されたものはその構想がヨーロッパの種々の型式に比べて、誠にユニークであり、中国では「漏刻」と呼ばれている。Needhamによれば、漏刻は呂才(655年没)によって作られたとされ、唐の時代に汎用されている¹⁾。しかしながら、唐以後かなり唐突に中国の歴史から漏刻は姿を消している。これは、J. S. MacNown が指摘しているように²⁾、世界の水時計全般についてもその傾向が認められている所である。

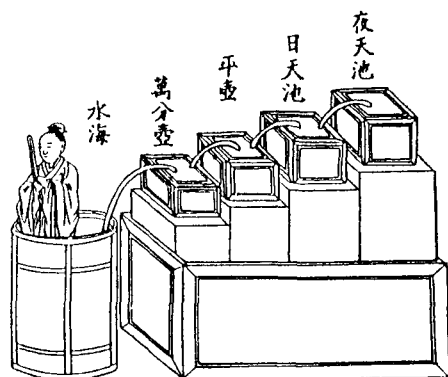
漏刻はその機構上の特徴から多段式水時計と呼ばれ、その水理学的特性については、先に武藤・酒井・川崎等によって報告されたが^{3) 4)}、今回、筆者等は研究の視点を変え、唐の時代の漏刻の仕組みや、その用法等について文献的に探究する手法として、全唐詩⁵⁾ および全唐文⁶⁾ を選び、手始めに、全唐詩の中から漏刻に関する詩文を選び出して、その時代考証に努めた。

2. 漏刻の概要

呂才の作とされている漏刻の図は、右に示す通り五個の水槽が階段上に設置されている。最上段の夜天池は、貯水槽とも称する給水源であり、以下日天池・平壺・萬分壺と水が移動し、それぞれが補正水槽として機能し、最下段の貯留槽とも称する水海に至る。この間、夜天池(貯水槽)は満水位から給水を開始し、給水量は非定常であるが、補正水槽を順次通過するに従って、水槽からの流出は定常化して、水海(貯留槽)への給水量は時計の精度を勘案すれば、ほぼ定常流入と考えてよい状態になり、水海の水面上昇に追隨する棒に刻んだ等間隔の目盛りが時刻を指し示すことになる。

なお、漏刻は多段式水時計とも呼ばれている^{3) 4)}。

圖 刻 漏 才 呂 廟



3. 全唐詩について

清の彭定求、楊中訥など10人による奉勅撰であり、全 900巻に及ぶ唐代の詩集である。康熙44年(1705)、揚州に詩局が開設され、同45年(1706)に完成、同46年(1707)に康熙帝(愛新覺羅玄燁)の序を巻頭に添えて印行された。唐代の詩(狭義の詩ばかりでなく、樂府、詞、さらに聯句や断片的な残句を含む)を網羅することを意図し、収録詩人は2200余人、総詩数 4万8900余首に及んでいる。

全唐詩には古来異本も数あるようであるが、今回の検索作業にあたっては、1960年に中華書局(北京王府井大街路36号)で第一刷出版の全25冊(総頁10,220頁)を用いた。

4. 考証例

検索に当たっては、漏刻の「漏」をキーワードとして、上記 4万8900余首から、510 首の詩を選び出し、漏刻の使われ方を考究するとともに、作者の年代等について考証した。その一例を次に示す。

・杜甫 [712~770]

「紫宸殿退朝口号」：・・・香飄合殿春風轉。花覆千官淑景移。晝漏稀聞高閣報。天顏有喜近臣知。・・・
「雞」：紀德名標五。初鳴度必三。殊方聽有異。失次曉無慙。問俗人情似。充苞爾輩堪。氣交亭育際。
巫峽漏可南。

・李白 [701~762]

「鳥棲曲」：姑蘇臺上鳥棲時。吳王宮裏醉西施。吳歌楚舞歡未畢。青山猶（一作猶）欲半邊日。
銀箭金壺（一昨金壺丁丁）漏水多。起看秋月墜江波。東方漸高奈樂（一作爾）何。
「擣衣篇」：・・・・・・。誰能攬鏡看愁髮。誰能攬鏡看愁髮。曉吹員管隨落花。夜擣戎衣向明月。
明月高高刻漏長。真珠簾箔掩蘭堂。橫垂寶幄同心結。半拂瓊筵蘇合香。・・・・・・

・蘇味道 [648?~705?]

「使領南閩崔馬二御史竝拜台郎」：振鷺齊飛日。遷鶯遠聽聞。明光共侍漏。清鑒各披雲。喜待廊廟舉。
嗟爲臺閣分。故林懷柏悅。新幄阻蘭薰。冠去神羊影。・・・・・・

・沈佺期 [656~714]

「酬蘇員外味道夏晚寓直省中見贈」：・・・・。冠劍無時釋。軒車待漏飛。明朝題漢柱。三署有光輝。

・宋之問 [765?~712]

「和姚給事寓直之作」：・・・・。禁靜鐘初徹。更疎漏漸長。曉河低武庫。流火度文昌。・・・・・・

・張九齡 [673~740]

「和許給事直夜簡諸公」：未央鐘漏晚。仙宇靄沈沈。武衛千盧合。嚴扃萬戶深。・・・・・・

・李頎 [690~751?]

「宿瑩公禪房聞梵」：花宮仙梵遠微微。月隱高城鐘漏稀。夜動霜林驚落葉。曉聞天籟發清機。・・・・・・

・王維 [701?~761]

「春日直門下省早朝」騎省直明光。雞鳴謁建章。遙聞侍中佩。暗識令君香。玉漏隨銅史。天書拜夕郎。
旌旗映闕闕。歌吹滿昭陽。官舍梅初紫。宮門柳欲黃。願將遲日意。同與聖恩長。

5. 考察

詩人の年表による考察および個々の考証例に関する考察は、紙面の都合で省略せざるを得ないので、ここには全般的考察事項のいくつかを列挙するに止める。

- 1) キーワードである「漏」は水時計を表す場合のほか、時刻そのものを表す場合があり、当時は時刻の測定にもっぱら漏刻が汎用されていたことが窺われる。
- 2) 「曉漏」（開城時刻）、「待漏」（謁見時刻）といった表現は、宮中や官公衙の時報であって、わが国飛鳥時代の最初の使われ方と良く似ている。
- 3) また、時報として宮中の鐘楼で鐘を鳴らしているが、本邦の飛鳥時代の方式と良く似ている。
- 4) 受水槽には、金属製のものが多く使用されていた（日本では漆塗の木製水槽）ようである。
- 5) 受水槽に落ち込む水音は、響くようにしていたものか、「漏聲」という表現が多く詳細は分明的でない。

参 考 文 献

- 1) Joseph Needham 原著、吉田忠 et al. 訳：中国の科学と文明 第五巻、思索社、pp. 170-192, 1956.
- 2) J. S. MacNown : When Time Flowed, 1976.
- 3) 酒井・武藤：多段式水時計の水理学的問題点、16回土木学会関東支部技術発表会概要集、II-42, 1988.
- 4) 川崎・武藤：多段式水時計の長期作動上の問題点、19回土木学会関東支部技術発表会概要集、II-7, 1991.
- 5) 王全點校：全唐詩 全25冊、中華書局、1960.
- 6) 中華書局編集部編：全唐文 全11冊、中華書局、1982.